頼芸と道三

美濃の乱世はじまりの地 山県市

山県市を訪ねて

其の壱

土岐頼芸と斎藤道三――二人の運命を分けた「大桑城」

濃尾平野の北の端に位置する岐阜県山県市。市内にある古城山（407.5m）の山頂一帯に大桑城はありました。

大桑城は、室町時代から戦国時代にかけて200余年にわたり美濃国を中心に勢力をふるった土岐氏によって本格的に整備されました。大桑城を最後に居城としたのは守護の土岐頼芸です。

古城山のふもとには城下町が築かれ、多くの町人でにぎわったといいます。しかし、父親の代から美濃を手中に入れようとしてきた家臣の斎藤道三によって城は攻め落とされ、頼芸は美濃から追放されました。大桑城は守護土岐氏の美濃支配終焉の地であるとともに、道三の「国盗り」達成の地となったのです。

夜明けの大桑城跡。古城山山頂のミニ大桑城（模擬天守閣）は、戦国時代にはなかった建物だが写真スポットとして人気

大桑城の中心地である主郭部（天守台）

古城山のふもとにある土岐氏の菩提寺・南泉寺。頼芸が描いたと伝わる鷹の絵などを所蔵する

土岐頼芸と大桑城

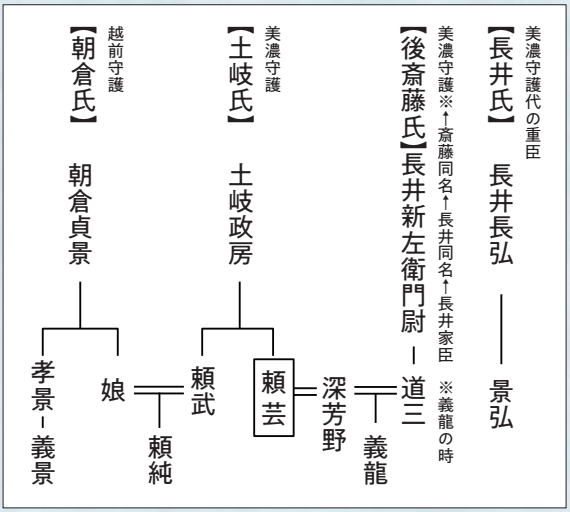
内堀信雄氏
（岐阜市教育委員会）

大桑城をめぐる土岐頼芸と斎藤道三の関係、そして二人がたどった運命について、最近の研究成果に詳しい岐阜市教育委員会の内堀信雄氏にご寄稿をいただきました。

頼芸、大桑城へ移る

土岐頼芸は美濃国最後の守護である。鷹の絵に堪能な文化人としても知られる。大永5年（1525）、長井長弘・長井新左衛門尉（斎藤道三の父）らが頼芸の兄の守護・頼武をクーデターにより追い落とした後、土岐家の家督を継承した。天文元年（1532）、頼芸は拠点を福光城（岐阜市立長良中学校周辺）から枝広館（岐阜市長良公園）へ移転。これはクーデター後、金華山周辺に本拠地を構えていた長井氏が自らの影響下に頼芸を置こうとしたためとされる（三宅2006）。枝広館に移って間もなく、長井長弘・長井新左衛門尉が相次いで死去すると、新左衛門尉の息子・斎藤道三は長井宗家を滅ぼした。

天文4年（1535）7月に長良川大洪水が発生。館や町に甚大な被害が出たため、頼芸は本拠を大桑城へ移したと伝えられる（『中島両以記文』※1）。この洪水をきっかけに、道三の台頭に反対する勢力が前守護頼武の息子頼純（頼充）を盟主とし、越前朝倉氏や近江六角氏の支援を受けて道三に戦いを挑む。この内乱は2年にわたり美濃国内各



土岐頼芸関係者系図

枝広館と大桑城の位置関係地図

所で繰り広げられた。戦いにおいて頼芸は道三と同じ陣営であると理解されてきたが、三宅唯美氏は頼芸が両陣営から距離を置いていた可能性を指摘する（三宅２０００）。そして天文８年（１５３９）までに道三と頼純は和睦した。大桑城近くの十五社神社に伝わる越前笏谷石製の一対の狛犬には「天文九庚子年」「奉土岐氏神」と刻まれている。おそらく和睦を祝して越前朝倉氏から土岐頼芸へ贈られたのだろう。

十五社神社の笏谷石製狛犬

大桑城に独自権力を目指す

近世伝承では天文８年頃斎藤道三は金華山の稲葉山城改修と城下町の建設に着手したとされるが、ほぼ同時期か少し前に土岐頼芸は大桑城で城と町の建設をはじめた。大桑城は美濃国最大の規模を誇る山城で、城主の館があったとみられる平坦地（伝台所）の直下には家臣の屋敷地と想定できる多数の雛壇状地形が築かれた。伝馬場を少し下ったところには２m以上の巨石を含む大形の石を立て並べた虎口といわれる出入口（伝岩門）を設ける。山麓の谷には城下町が営まれた。谷の入口には堀と土塁からなる防禦施設（惣構）が築かれた。

この時期の文書を詳しく検討した三宅唯美氏は、新たな近臣の登場などからみて頼芸の元に道三から独立した権力が生まれつつあったのではないかと推定している（『信長の基礎構造』寄稿中の三宅氏の論考による）。遺跡に見られる城づくりや町づくりは道三の稲葉山城・城下町と全く異なるものであり、頼芸の独自性を考古学の立場からも補強する。

和睦から4年後の天文12年（１５４３）、大桑城で大きな戦いがあった（『別本仁岫録』※2）。この戦いは、道三が大桑城に居た土岐頼純派の勢力を駆逐するとともに、守護頼芸が持っていた道三からの独立を目指す部分を排除したものと考えられている（三宅氏御教示）。ちなみに大桑に江戸時代に建てられた石碑や供養塔にはこの戦いの年が天文11年（１５４２）と記されている。大桑城の山上部で採集された土器・陶磁器には瀬戸美濃産の陶器に加

土岐頼芸作と伝わる鷹画
（「絹本着色 鷹の画」南泉寺蔵）

大桑城での戦いの戦死者を弔う「六万墓」

えて中国から輸入された高級青磁を含む輸入品が多数含まれており、山上での華やかな生活の一端がうかがえる。製品の多くが火を受けていることから落城に伴う火災によって捨てられたと見られる。遺物で見る限り大桑城は天文12年（１５４３）に落城し、その後は生活の場としては殆ど使われていなかったようである。

大桑城の戦い後の頼芸

天文12年（１５４３）の大桑城の戦い後、頼芸はどこに居たのかはっきりしない。近世の伝承ではあるが『中島両以記文』に「鷺山に御在城」と書かれていることと考古学上の所見から、私は鷺山城（岐阜市鷺山）に居た可能性を考えている。

天文13年（１５４４）の加納口の戦いを経て、道三・頼芸と頼純は再び和睦。天文15年（１５４６）に頼純が道三の娘婿として越前から大桑城に戻るも翌天文16年（１５４７）に頼純は急死してしまう。

頼芸の追放の年は、同時代文書の検討から天文19年（１５５０）後葉という説が有力である。『六角承禎条書』※3によれば永禄3年（１５６０）には近江六角氏の元に寄寓していた。頼芸はその後、奈良や上総などを転々とする。甲斐に居た天正10年（１５８２）3月、信長の武田攻めの際に発見されて美濃へ戻り、同年12月に現在の揖斐川町谷汲岐礼で死去した。

土岐頼芸の墓（岐阜県揖斐川町）

大桑城の特色

大桑城の山上の段々地形を中心とした一帯について南近江守護六角氏の居城観音寺城（滋賀県近江八幡市）の構造との類似を指摘する意見があり（中井２０１０）。近年、石川美咲氏は大桑城の全体構造に越前守護朝倉氏の居城一乗谷城（福井市）との類似性を見出した（石川２０１９）。美濃、越前、近江の守護の山城には何らかの共通性があったのかもしれない。

また、大桑城山麓の谷部には城下町が営まれ、谷入口部には堀や土塁からなる惣構が築かれている。この惣構には「四国堀」「越前堀」という越前など他国との関係をうかがわ

四国堀跡

岩門

せる地名が残る。私見では山上部の「岩門」の巨石石垣虎口も越前一乗谷朝倉氏遺跡下城戸などとよく似ていると考えている。こうした遺構細部に見られる越前的な要素については、母が越前朝倉氏の娘であった土岐頼純の関与が思い浮かぶ。いずれにせよ、詳しい検討は今後の課題である。

道三にとっての大桑城

天文19年頃、道三は、頼芸を追放して国盗りを成し遂げる。『中島両以記文』には「大桑城で国中の仕置きをし、諸侍の礼を請けた」と書かれている。守護の城である大桑城でなければ国盗り宣言はできなかったのだろう。弘治元年（1555）に息子・義龍に叛かれ、翌年長良川の戦いで敗死してしまう。『信長公記』※4は義龍謀反の時、道三は「山県という山中」に逃げたと記す。この山中は大桑城という説が有力である。道三は長良川の戦いに際して「大桑」の注記がある遺言書を認めたが、『濃飛両国通史』※5によれば、政権の所在地が大桑城であることを示すという。道三にとって大桑城とは、ついに就くことが叶わなかった守護の城だったのだろう。

大桑城跡（古城山山頂）から南方を望む。
中央奥は稲葉山城（後の岐阜城）が築かれた金華山

【注釈】

※1中島両以記文　江戸前期の美濃の豪商・中島両以が、中島家の由来と自叙伝を記した史料。

※2別本仁岫録　土岐政房（頼武と頼芸の父）の招きで大桑の地に南泉寺を開山した仁岫宗寿に関する記録。

※3六角承禎条書　近江の六角承禎が自分の子と斎藤義龍（道三の息子）の娘との縁組を止めさせるように命じた文書。道三が父・長井新左衛門尉と親子二代がかりで美濃の国盗りを達成したことを示す史料として注目された。

※4信長公記　織田信長の一代記。信長の旧臣が著したもので、史料としての信頼が高い。

※5濃飛両国通史　岐阜県教育会発行。1923～1924年。

【引用文献】

・三宅唯美「枝広館・大桑城と守護・土岐氏の動向」『城之内遺跡（第二分冊）』岐阜市教育委員会、2000年
・三宅唯美「戦国期美濃国の守護権力と守護所の変遷」『守護所と戦国城下町』高志書院、2006年
・中井均「大桑城」『岐阜の山城ベスト50を歩く』サンライズ出版、2010年
・石川美咲「大桑城」『東海の名城を歩く―岐阜編―』吉川弘文館、2019年

プロフィール

内堀信雄（うちぼり のぶお）氏

1959年 栃木県宇都宮市に生まれる
1986年 名古屋大学大学院文学研究科（考古学）修了
岐阜市教育委員会にて信長公居館跡発掘調査、長良川鵜飼習俗調査などを担当
現在、岐阜市教育委員会社会教育課長

■主な著書
『守護所と戦国城下町』編著、高志書院、2006年
『東海の名城を歩く―岐阜編―』編著、吉川弘文館、2019年

山県市を訪ねて

其の弐

光秀の出生と晩年の謎が眠る「桔梗塚」

山県市は、「明智光秀ゆかりの地」の一つでもあります。市内の中洞地区には、光秀の墓とされる桔梗塚があるほか、光秀の母が産湯の水を汲んだという井戸跡などが残っています。

伝承によると、光秀は土岐元頼（基頼）と中洞の豪族の娘との間に、中洞の地で生まれたといいます。幼くして父が亡くなり、美濃国可児郡（現岐阜県可児市）の明智城主・明智光綱の養子となりました。

本能寺の変で織田信長を討った光秀は、山崎の合戦で敗走中に命を落としましたが、中洞では「死んだのは影武者で、光秀本人は生きていた」と伝わっています。郷里の中洞に落ち延びた光秀は、身代わりとなった荒木行信の忠誠に深く感銘し、荒深小五郎と名乗って中洞で暮らしました。後に関ケ原の合戦に向かう途中、増水した川で流されて亡くなり、戦地にたどり着くことはなかったといいます。

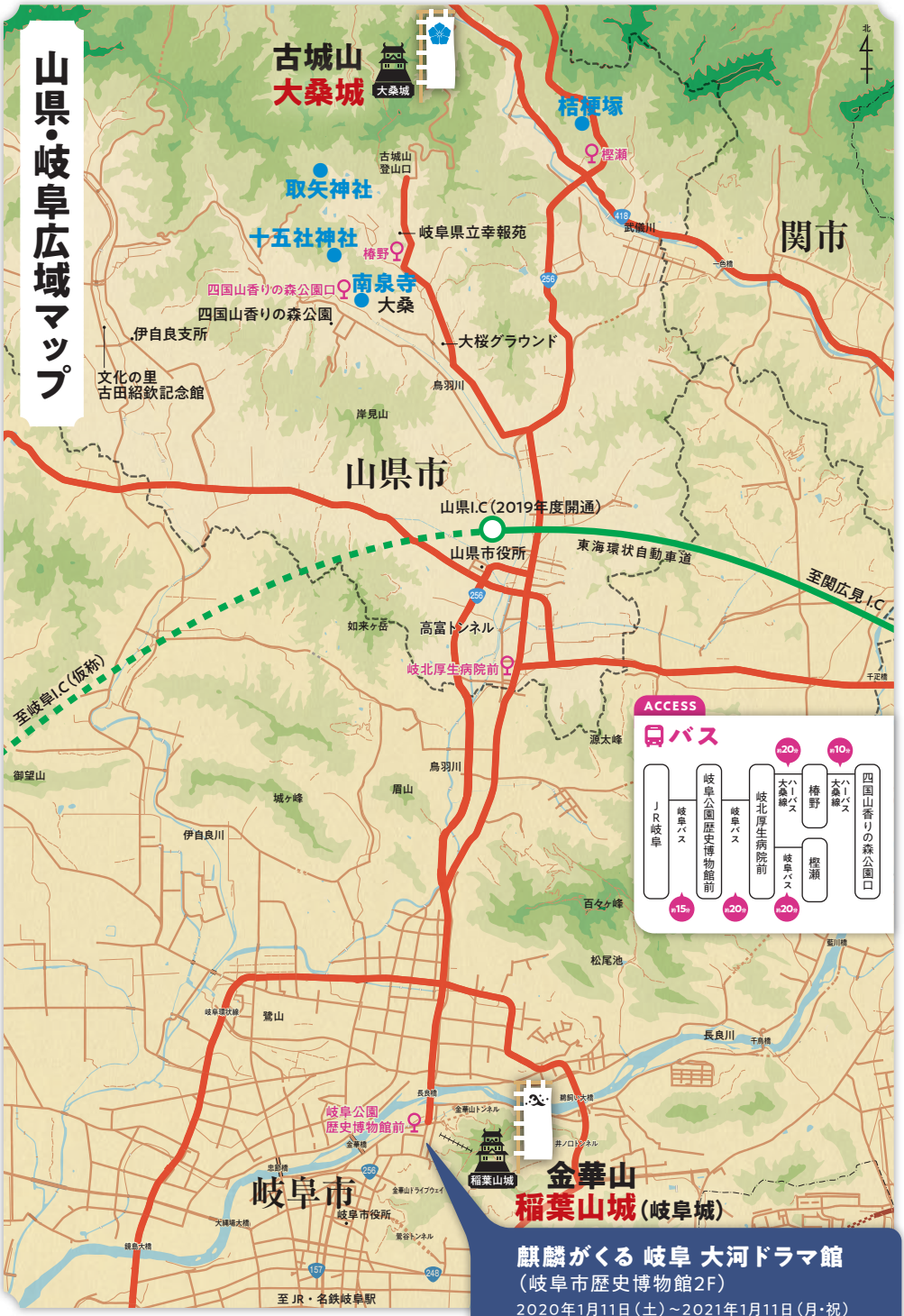
明智光秀の墓とされる桔梗塚

〈表紙〉
大桑城とその周辺について描かれた近世の絵図をもとにデザインしています。

美濃の乱世はじまりの地 山県市「頼芸と道三」
発行／山県市教育委員会
〒501-2192　岐阜県山県市高木1000番地1
Tel.0581-22-6845　Fax.0581-22-6851
E-mail:info@city.gifu-yamagata.lg.jp
http://www.city.yamagata.gifu.jp/

本冊子は令和元年度岐阜県清流の国ぎふ推進補助金を受けています。

山県・岐阜広域マップ



麒麟がくる 岐阜 大河ドラマ館
（岐阜市歴史博物館2F）
2020年1月11日（土）～2021年1月11日（月・祝）